

研究タイトル：

## 万葉受容の通史的研究



氏名： 眞野 道子 / MANO Michiko E-mail: mano@toyota-ct.ac.jp

職名： 講師 学位： 博士(文学)

所属学会・協会： 和歌文学会, 中古文学会, 名古屋大学国語国文学会

キーワード： 日本古典文学, 和歌文学, 万葉集, 源氏物語

 技術相談  
 提供可能技術：
 

- ・日本古典籍の書誌調査と目録作成
- ・平安文学やくずし字に関する出前授業や講演
- ・留学生を対象とした日本語・日本文化の授業

### 研究内容： 平安時代から江戸時代にかけての『万葉集』の受容および流布の実態

現存最古の和歌集であり、「万葉仮名」という特殊表記をとるためにいまだ不明な点も多い『万葉集』がそれ以降に成立した文学作品にどのような影響を与えたかを通史的に考察する。併せて、その時々にも読まれていたと考えられる『万葉集』のテキストの復元を試みる。

#### 1) 平安時代中期における万葉受容

奈良時代に成立した『万葉集』は、日本語を表記するために、漢字を本来の意味とは関係なく表音文字として用いた「万葉仮名」によって書かれているため、その成立から約百年後、ひらがなが普及した平安時代前期にはすでに一般に読めないものとなっていた。その後、平安時代中期に源順らの「梨壺の五人」による大規模な訓読事業が行われ、再び注目されるようになった万葉歌の影響を受けて多くの和歌が詠まれたが、すぐに極端に走りすぎたそれに対する反発が起こり、流行は一時的なものに終わったように見える。しかし、そのすべてが淘汰されたわけではなく、万葉ブームの痕跡は『源氏物語』など、その後成立した文学作品の随所に見られる。それらを精査することにより、当時の万葉受容の実態および平安文学に及ぼした影響について考察している。

#### 2) 江戸時代前期における万葉受容

江戸時代前期は、出版メディアの成立により、本の大量生産が可能になり、文学の享受層が大幅に拡大した時代である。そのため、現存している万葉関係の本も中世以前の写本の時代と比べて圧倒的に多く、その当時における万葉受容の実態を調べるのに、資料面で非常に恵まれていると言える。これまでは江戸時代の『万葉集』受容といえば、江戸時代中期に興り、その文献学的手法によって『万葉集』の注釈を大きく前進させた、国学に重きが置かれてきた。その反面、国学者のような、いわばプロの研究者以外の人々にどのように受け入れられたかについてはあまり研究されていない。文学が急激に普及した当時、『万葉集』はどのようなものとして認識され、読まれていたのか、その実態解明に取り組んでいる。

#### 3) 『万葉集』のテキストの復元

『万葉集』の特殊表記はすでに平安時代には読めなくなっていたため、さまざまな訓読の付された本が存在する。それを時代ごとに整理し、失われたものについては復元してその当時の「ありのまま」の『万葉集』を探ることも、上記1)2)に付随し、テーマの1つとしている。

### 提供可能な設備・機器：

名称・型番(メーカー)	